

コロナ状況下の日本で 伊勢大神楽を撮る

神野知恵 かみのちえ

国立民族学博物館人文コミュニケーション・特任助教、AA研共同研究員

私は2016年から伊勢大神楽のフィールドワークを行っている。今年で6目になるが、そのうち3年間はコロナ状況下となった。このエッセイでは、伊勢大神楽の調査や映像民族誌制作の面白さと、パンデミック期間中に取材を行う難しさについて紹介する。

旅する宗教芸能者、伊勢大神楽

伊勢大神楽とは、今でも家々を訪ね歩いて獅子舞を奉納することをなりわいとする人々のことである。国の重要無形民俗文化財の保持団体に指定された伊勢大神楽講社には、五つの社中がある。それぞれの社中に属する神楽師たちは、三重県桑名市を拠点とし、一年を通じて西日本各地を廻る「回檀」の生活を送っている。社中ごとに先祖代々「檀那場」と呼ばれる地域を担っており、それらの地域の家々を毎年決まった時期に訪ねている。今日も、どこかの玄関先で獅子舞を舞っているのである。私は彼らのことを、旅する宗教芸能者の姿を現代に伝える貴重な存在だと考え、2016年より回檀への同行調査を行っている。

同行調査の面白さ

伊勢大神楽の神楽師たちは毎朝7時頃、宿泊する旅館を出て地域を廻り始める。夕方まで100軒近くの家々を訪ね、一軒一軒でお祝いをし、庭先や座敷で獅子舞を舞う。多い日は300軒近くを、二手、三手にわかれて廻る。真夏の灼熱地獄であろうが、真冬で路面凍結しているようだが、回檀は行われる。私の仕事は、彼

らに一生懸命ついて廻り、写真や映像を撮り、神楽を迎える人々から話を聞き取ることだ。ときに熱中症や筋肉痛になりながらも、一緒に歩いている。「何千回と見ていて飽きないのか」と聞かれることもある。私が見ているのは芸能そのものだけではなく、家ごとに異なる反応や、神棚の祀り方、玄関や庭の趣向、道行く個性的な人物との対話なども含む。そのため、調査のたびに新たな出会いやハプニングが起こり、飽きることはない。

なかには神楽師たちをお茶やお酒でもてなす家もあり、私も上がって一緒にご馳走になることがある。季節や地域ごとに特色のある品々のお相伴にあずかり、これを記録することも重要な調査の一部である。カメラを構えていると、よく報道関係と勘違いされる。少しデリケートに見える家庭では、カメラを降ろして、門の外からそつと眺めることにしている。ときに私を神楽師の一員が家族だと思ひ、家を廻る順番などを聞いてくる人もいる。そのたびに、研究者として同行しているのだと慌てて説明する。堂々としていれば良さそうなのだが、回檀に第三者がついて廻ること自体、不自然なことであるという自覚があるので、

毎回言い訳をするような気分になる。神社やホールなどでカメラを三脚に据えて演舞を観察する芸能調査と比べ、異なるタイプの体力と気力が必要とされる現場だということがおわかり頂けるだろう。

現役神楽師は全員が男性であり、一つの社中は20～70代の神楽師6～10名ほどで構成される。初めて調査に行った時は、ひとりで男性陣の間に飛び込んだため、どうふるまっよいかわからず緊張したが、今では有難いことに非常に心安く接して頂いている。村々を廻った後、同じ旅館に泊まって、晩に一献を交わしながら各地での思い出話を伺うことも大事な時間になっている。

コロナ状況下での変化

そのように調査を行ってきたが、2020年初頭にコロナ状況下に突入した。日本各地の祭礼行事が中止になるなか、伊勢大神楽は休まず回檀を続けた。これは、きわめて特殊なことである。地域の人々が地元で演じる郷土芸能と比べ、専業集団が各地を訪ねて演じる伊勢大神楽は、特性が大きく異なるということが浮き彫りになった。神楽師たちは、回檀をなりわいとしているため、コロナ状況下であっても中止するという選択肢を選ばなかった。または「選ばなかった」のだろう。

迎える側はというと、コロナを理由に、回檀の全面中止を要請してきたのは、全社中を見ても二つの地区のみだった。ただし、個人レベルでは断る家も無論あった。「感染防止のため」と貼り紙を出す人もいれば、「事情により」とぼやかす人もいた。実際は感染への恐怖からくるものか、罹患者がいるからか、はたまた神事への関心の薄れによるものかはわからない。しかし、コロナが何らかのきっかけになったことは確かであろう。

*写真はすべて筆者撮影。



いつもは台所にあがってお祝いする家だが、玄関先での対応を依頼された(2021年1月、滋賀県某所)。



図 筆者のこれまでの同行調査地域

例年通り玄関先で神楽師たちにトーストがふるまわれた
(2021年12月、大阪府堺市)。



家族総出で獅子舞奉納を見守る
(2021年1月、滋賀県愛知郡)。



コロナ状況下でも総舞が行われ、子どもたちが曲芸師とチャリ師の漫談を楽しんだ(2021年4月、滋賀県長浜市)。

獅子に赤ちゃんの頭を噛んでもらい健康を願う
(2022年10月、大阪府松原市)。

最も大きい変化は、多くの地域で「総舞」が中止になったことだ。総舞とは、自治会や寺社、または個人が主催して、家々のお祓いとは別に初穂料を出して行われるもので、その額によって1~2時間程度にわたって獅子舞や曲芸が地域住民の前で披露される。大勢が集まると感染リスクにつながるため、総舞は中止になる所が多かった。ただし小1時間程度で、見に来る観客も少ない所では例年通り開催された。

また、接待の文化にも変化が見られた。地域によっては、自治会長宅や、公民館、神社の社務所において、手料理や仕出し弁当等で神楽師をもてなす風習が見られる。飲食を伴うためコロナ状況下では中止にせざるを得なかった。そもそも緊急事態宣言下では、公民館の使用そのものが制限された。そのような場合、神楽師たちは昼食場所に困ることになる。県外からの来客を歓迎しない飲食店に、大人数で押しかけることも難しい。そういうときは、旅館に戻ったり、車や野外で弁当を食べたりしなければならなかった。そんな状況でも、「われらは今までもずっと道端で過ごしてきたから」と笑う姿に、私は改めて神楽師たちのたくましさとおおらかさを感じたのだった。

苦戦した「映像民族誌」制作プロジェクト

そんななか、私はコロナ以前に決定していた国立民族学博物館の「映像民族誌」制

作プロジェクトに頭を悩ませていた。本来、伊勢大神楽講社のなかでも中心的な役割を担う団体である山本源太夫社中の一年を撮るつもりだった。しかし、2020年度上半期は警戒レベルが高く、撮影班だけでなく私自身も出張許可が下りなかった。そのため、収録開始を同年9月末に延期し、出来る限り少人数で撮影を行った。地域では、撮影班を警戒する人もいだろうと考え、取材の目的と責任の所在が一目でわかる説明書きを配りながら撮影を行った。現地の人々は思ったよりもほがらかで、毎年恒例の獅子舞が家にやってきてくれることを喜んでいて。さらに、飲食による接待が行われる家も案外多かった。「毎年なのに、何も出さないと寂しいし申し訳ないから」と神楽師に酒や肴をふるまう人々の心が、なんとも温かく感じられた。コロナ以前ならば、世の中に知らせたいもっとも素敵な場面であったが、感染の可能性やパッシングが憂慮されたため、記録だけは残しておき、発表の時を待った。

ちなみに今回、撮影を担当したカメラマン2名は、普段から国立民族学博物館の映像を多数手がける映像制作会社のスタッフである。これまでの取材では多くの場合、相手への質問は研究者から行うようにし、スタッフの音声は入れないようにしてきたという。しかし今回はコロナ状況下での取材ということもあり、カメラマンから

も挨拶しながら撮ってもらうことを決めた。有難いことに、取材は概ね順調だった。ただし、たまたま私が別の家にいたとき、ある家の主人からスタッフが少々憤慨気味に取材の仔細を尋ねられたという。その家には「県をまたぐ移動自粛要請下なので、お祓いは玄関外でお願いします」という慎重な貼り紙が掲げられていた。後で謝罪がてら訳を聞きに行くと、いつもは玄関から中に入って神楽にお祓いしてもらっているが、今年は家族で何度も話し合った結果こうなったという。家族間でも微妙な葛藤があったのかもしれない。コロナに対する人びとの揺れる感情、そして取材班の存在が与える影響について、考えないわけにはいかない一件となった。

このようにして普段よりもデリケートな現場ではあったものの、年間を通じて回槽は続けられた。コロナ状況下で外出できず、楽しみも少ないなか、玄関先で厄払いをしてくれる伊勢大神楽に、多くの人が元気をもらったことだろう。私たちもそのおかげで、映像民族誌を完成させることが出来た。本来ならば大々的に行われるはずの総舞が縮小されたり、曲芸や獅子舞を見つめる地域の人びとの顔がマスクで覆われて表情がわからなかったりと、博物館に残す映像としては惜しい部分もあった。しかし、激動のパンデミック下での伊勢大神楽を撮ることはもう二度とないだろう。そうした意味で、大変貴重な機会となった。「それでも獅子は旅を続ける～山本源太夫社中 伊勢大神楽日誌～」と題した本作品は、2022年の東京ドキュメンタリー映画祭人類学・民俗映像部門にノミネートされ、東京で上映された。伊勢大神楽が江戸時代から地域を廻り続けてきたこと、コロナ状況下においてもその文化が途絶えなかったことの貴重さを、この作品を通じて知ってもらえれば、と考えている。

